



記憶理論の歴史

コレージュ・ド・フランス講義 1903-1904年度

アンリ・ベルクソン著

藤田尚志・平井靖史・天野恵美理・岡嶋隆佑・木山裕登 訳

書肆心水

Henri BERGSON

HISTOIRE DES THÉORIES DE LA MÉMOIRE
Cours au Collège de France 1903-1904

Édition établie, annotée et présentée par Arnaud FRANÇOIS,
sous la direction scientifique de Frédéric WORMS

©PRESSES UNIVERSITAIRES DE FRANCE / HUMENSIS, 2018

This book is published in Japan by arrangement with Humensis,
through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

目 次

凡 例 (訳者) 15	分析と直観 一九〇三年一二月二一日 24	第 1 講
校訂者序 記憶から自由へ アルノー・フランソワ 17	日常的・科学的認識と哲学的認識 精神の輪郭——直観の例としてのダ・ヴィンチの絵画論 24	
諸分析の検討と諸体系の歴史 30	心理学的観点から見た記憶の四つのモーメント——形成・再生・連合・位置づけ 30	
哲学的観点からの記憶の心理学批判 (1) 位置づけ 36	哲学的観点からの記憶の心理学批判 (2) 連合と流動性 38	
哲学的観点からの記憶の心理学批判 (2) 連合と流動性 38		
第 2 講	記憶と知覚の差異——テームス説とビネ説 一九〇三年一二月一八日 42	
視覚的記憶を特徴づけるもの、それを知覚から区別するもの 42	記憶と知覚の差異——テームス説 (例——チエスの例1、パンテオン) 43	
プロセスの哲学からの批判 (例——抜歯、催眠暗示、ピアニストの指) 46	記憶と知覚の本性の差異 49	
二つの反証例 (ゴルトンの調査、チエスの例2) 52	力動的記憶とイメージの探究 (例——ラマルティームスの詩) 56	
第 3 講	連合説の検討——レーマンとヘフディングの再認論 一九〇四年一月八日 60	
観念連合の問題点 60	馴染みの感じはどこからくるか 61	

デジヤヴュのメカニズム	63
レーマンの再認論——近接連合説	65
ヘフディングの再認識論——類似連合説	65
記憶の存在理由	71
	70

第4講

脳と再認 一九〇四年一月一五日 74

- 類似説の欠点 75
- 原子論的描像の限界 77
- 失認のさまざまな事例 79
- 失認の原因は何か 83
- 自動的図式による記憶と知覚の媒介 85
- 自動的再認 89

第5講

三つの再認 一九〇四年一月二三日 91

- 病理学的観察の利点 92
- (一) 注意的再認——知覚の再構成 93
- 内的反復の端緒としての動的図式 93
- (二) 自動的再認——知覚の延長 98
- 人間と動物における再認の違い 102
- (三) 個人的再認 104

第6講

記憶の諸平面 一九〇四年一月二九日 106

- 個人的再認とは何か 101
- 病理学に基づく検討 109
- 記憶の全体像 113

記憶のさまざまな平面 1-15
異なる高さの面に身を置くこと 1-18
記憶の現実化と選別 1-19

第7講

夢と覚醒 一九〇四年二月五日 1-22

記憶の二つの平面 1-22
三つの根拠 1-26
二つの記憶の関係 1-27
夢と眠り 1-28
覚醒と努力 1-30
回復に向けた努力としての病 1-34

第8講

心の病について 一九〇四年二月一二日

1-38

心的エネルギー 1-40
エネルギー不足の二つの形態 1-41
第一の形態——記憶の体積の減少 1-43
第二の形態——記憶の密度の減少 1-47
注意の三つの特徴 1-51

第9講

注意 意 一九〇四年二月一九日 1-54

1-54

注意における創造——表象の強度と豊かさの増大 1-54
注意のメカニズム——記憶と知覚の協働 1-57
芸術や科学における新しさについて 1-60
帰結(1)——教育、あるいは知覚の明瞭さの増大について 1-67
帰結(2)——知覚の強度の増大について 1-66

第10講

注意と記憶の能動性 一九〇四年二月二六日

172

- 強度の増大(1) —— シュレーダーの階段 172
強度の増大(2) —— イメージの断続的な投射 174
明瞭さの増大(1) —— 記憶の能動性 175
明瞭さの増大(2) —— 知覚の記憶への依存 178
理解可能性の増大(1) —— 発話の解釈のメカニズム 180
理解可能性の増大(2) —— 構成的に解釈する 182
理解可能性の増大(3) —— 思考はイメージではない 185

第11講

連合主義心理学の理論的起源 一九〇四年三月四日

188

- 物理学と化学の模倣という方法 188
方法的模倣への批判 —— 対象と方法の関係について 190
学の枠組みをア・プリオリなものと見なす傾向 193
科学法則の基準 —— 行動上の有用性 196
連合主義心理学の基本的要請とその批判(1) —— 知覚と記憶のあいだの強度の差異 199
連合主義心理学の基本的要請とその批判(2) —— 心理学的な単純状態 199
連合主義心理学の根本法則 —— 類似と近接 201

第12講

記憶と脳状態の関係について 一九〇四年三月一日

205

- 連合主義心理学と脳に基づく記憶理論との相補的関係性 205
仮説と事実 207
なぜ連合主義心理学は明瞭なのか —— 明瞭さと空間的なもの 209
なぜ脳への局在化は自然で事実に適合しているように見えるのか 210

記憶と運動 2-1-3
記憶と脳状態の関係 2-1-5
知覚と脳状態の関係 2-1-8

第13講

随伴現象説の諸困難

一九〇四年三月一八日 220

随伴現象説の形而上学的困難 2-2-0
科学者の務め、形而上学者の務め 2-2-4
随伴現象説の第一の心理学的・病理学的困難 2-2-5
随伴現象説の第二の困難——弁別について 2-2-6
隨伴現象説の第三の困難——記憶の分類とリボーの法則 2-3-0

第14講

〔記録が失われている〕一九〇四年三月二十五日 234

第15講

古代の心理学のある形而上学的基盤

一九〇四年四月一五日 235

今後の講義計画 2-3-5
古代の心理学に特徴的な知性観 2-3-6
知性的実在の一致性 2-3-8
プラトンとアリストテレスにおける思考と事物の中間項 2-4-0
古代の自然科学・心理学の眞の対象——古代哲学の拡大鏡としてのプロティノス哲学 2-4-4
アリストテレス心理学の形而上学的原理——神的思考・ヌース・質料 2-4-4
2-4-2

第16講

古代の知覚論・記憶論

一九〇四年四月二二日 249

アリストテレスの知性論——彼の知覚論・記憶論を説明するための準備作業 2-5-0
物体觀の古代と近代における相違 2-5-0
2-4-9

古代の物体観に通じるものとしての芸術家の觀点 2102
有機体の形相としての魂——アリストテレスの考える魂について 2154
アリストテレスの知覚論 2157
アリストテレスの記憶論 2159
アリストテレスの理解が私たちにとって困難である原因 2601
エピクロスとデモクリトスの例 263

第17講

デカルト主義への歩み 一九〇四年四月二九日 266

古代人の知覚論・記憶論のもととなる物質と意識についての考え方 266

古代の記憶理論と近代の記憶理論 269

デカルトの準備段階としてのガレノス 270

デカルト的な理論が生み出した形而上学的な学説と「科学的な」学説 273

古代の科学および近代の科学の基本的公準 274

古代の科学観と近代の科学観 275

近代における心身問題の出現 278

第18講

近代形而上学の並行論 一九〇四年五月六日 282

原子論仮説と同等性仮説——記憶についての二つの精神生理学的仮説 282

二つの命題に対してなされるべき批判 284

意識および記憶の生 285

古代の並行論から近代の並行論へ 287

ライプニッツ、スピノザの並行論 290

スピノザ的並行論に対するデカルト幾何学の寄与 293

スピノザ主義者ライプニッツ、マルブランシュ 295

第19講

形而上学的並行論の科学への浸透 一九〇四年五月一三日 298

今回の講義の目的 299
コンディヤックにおけるデカルト主義と並行論 299
ボネにおける並行論とその形而上学的起源 301
ラ・メトリにおける並行論とデカルト主義 305
カバニスにおける並行論とその形而上学的起源 305
テヌにおける並行論とスピノザ主義 309
イギリス、ドイツにおける並行論——ハートリー、ペイン、ヴォルフ 308
総括と来年度の見通し 314

注

訳者解説 369
訳者あとがき 385
人名索引 408

317

311

記憶理論の歴史

コレージュ・ド・フランス講義

一九〇三—一九〇四年度

凡例

本書は、Henri Bergson, *Histoire des théories de la mémoire. Cours au Collège de France 1903-1904*, édition établie, annotée et présentée par Arnaud François, sous la direction scientifique de Frédéric Worms, Paris: PUF, 2018, 384 p. の全訳である。詳細は「訳者あとがき」に譲り、以下では原則のみを記す。

- 〔 〕は訳者による補足。()は基本的に原経りを明示するために用いられていても、文意を取りやかすための日本語表現の工夫として用いられている場合もある。
- 詳細な目次、各講のタイトル、小見出しはすべて、読者の便宜を考えた、訳者による追加である。
- 読み上げ原稿のない講義の速記から本講義錄の性格上、文章には繰り返しや間投詞、感嘆符など口語固有の表現がかなり多い。翻訳として妥当な範囲で簡素化を心掛けた。意味のある言ふ換えの場合にはもちろん残してある。
- 鍵語となる「記憶」には *souvenir* から *mémoire* までの単語があるが、機械的に別の訳語を割り当てるのではなく、混在する箇所など必要な範囲でのみ部分的にルビを振るという方針を採用した。詳しい理由・方針については「訳者あとがき」で述べる。
- ベルクソンによるとスピノザの引用に関して、校訂者フランソワは注にラテン語原文を記しているが、本訳書では代わりにベルクソンによるフランス語訳を記した。
- 原書では、注が通し番号を振られている。原書の当該頁との大まかな対応が取れるようとの配慮から、本訳書では、注の中の原注番号を「[1]」～「[594]」の形で残してある。
- ベルクソンの著作に関する略号は以下のとおりである。
 - DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience* (1889), éd. Arnaud Bouaniche (AB), Paris: PUF, coll. « Quadrige », 2007, 322 p. 『意識に直接与えられたものによる心の組織』(合田正人・平井清史訳)、筑摩学芸文庫、1100-1年。

- DS: *Les Deux Sources de la morale et de la religion* (1932), éd. Frédéric Keck (FK) et Ghislain Watelot (GW), Paris: PUF, coll. « Quadrigé », 2008, 708 p. 『道徳の二つの源流』(スル・モラル・ドゥ・ドゥ・ソウル)、田中久松・吉澤一郎著、1100年。
- EC: *L'Évolution créatrice* (1907), éd. Arnaud François (AF), Paris: PUF, coll. « Quadrigé », 2007, 696 p. 『創造的進化』(クレア・ド・ラ・エボリューション・クリエイターヴル)、田中久松・吉澤一郎著、1100年。
- ES: *L'Énergie spirituelle* (1919), éd. Elié During (ED), AF, Stéphane Madelrieux (SM), CR, GSB et GW, Paris: PUF, coll. « Quadrigé », 2009, 508 p. 『精神のエネルギー』(エナジー・ド・ラ・ムーム)、吉澤一郎著、1100年。
- HIT: *Histoire de l'idée de temps. Cours au Collège de France 1902-1903*, édition établie, annotée et présentée par Camille Riquier, sous la direction scientifique de Frédéric Worms, Paris: PUF, 2016, 395 p. 『時間概念の歴史』(トキノリョウ・ド・カヨウ・ノ・シキ)、吉澤一郎・木下絵義著、書肆心水、1100年。
- M: *Mélanges*, éd. André Robinet, PUF, 1972 p. 『雑纂』(田水社版『メランジェ全集』第八・九巻)、1船取錄。
- MM: *Matière et mémoire* (1896), éd. Camille Riquier (CR), Paris: PUF, coll. « Quadrigé », 2008, 521 p. 『物質と記憶』(メモリ・ド・ラ・マテリア)、吉澤一郎著、1100年。
- PM: *La Pensée et le Mouvant* (1934), éd. AB, Anthony Feneuil, AF, Frédéric Fruteau de Lacroix, SM, Claire Marin, CR et GW, Paris: PUF, coll. « Quadrigé », 2009, 612 p. 『思想と動く』(ムーヴン・ド・ラ・ムンダント)、吉澤一郎著、1100年。
- R: *Le Rire* (1900), éd. Guillaume Sébertin-Blanc (GSB), Paris: PUF, coll. « Quadrigé », 2007, 359 p. 『笑』(ムカシ)、吉澤一郎著、1100年。

校訂者序　記憶から自由へ

アルノー・フランソワ

「記憶理論の歴史」（一九〇三—一九〇四年度）は、ベルクソンがコレージュ・ド・フランスの「ギリシア・ローマ哲学」講座で行なった最後の講義である。翌一九〇四—一九〇五年度の「自由の問題の進展」^{*1}から、彼は「現代哲学の歴史」と名付けられた講座で講義を行なうことになる。金曜日に行なわれていたこの「記憶理論の歴史」講義と並行して、土曜日にはアリストテレスの『形而上学』^{ラムダ}▲卷〔第十二卷〕のテクスト講読が行なわれていたが、このことは、ここに私たちが再現する講義への影響がないわけではない。

ベルクソンが与えたタイトルにもかかわらず、本講義はまずもって、他の諸講義に比べれば——少なくとも私たちに内容が伝わっている、本講義の前後に行なわれた一九〇二—一九〇三年度の「時間観念の歴史」講義^{*2}や一九〇四—一九〇五年度の「自由の問題の進展」講義に比べれば——、より理論的、彼自身の表現を用いれば、より「学説的」であつて、つまりはより「歴史的」でないという特徴によつて際立つている。ベルクソンはここで、「全一九講のうち」一四講を記憶の問題それ自体の検討に充てており^{*3}、彼が諸体系の歴史のほうに回顧的な眼差しを向けるのは、ようやく最後の五講に至つてのことである^{*4}。しかしだからといって、これらの最後の数講が、それまでの講義への「補遺」にすぎないというわけではない。むしろ逆に最後の数講は、本講義第一部の大きなテーマの一つ^{*5}——脳的なものと精神的なものの同等性という考えは、実験的（経験的）な起源ではなく、形而上学的な起源に由来するものである——をいわば証拠に基づいて証明することになるのだ。そういうわけで、ベルクソンは講義全体の意図について述べる際に、この講義を「記憶理論の歴史」という告知していた通りの標題で呼んでみたり、あるいは例えれば第十講の場合のように「記憶理論の批判」と呼んでみたりと無頓着でいられるのである。講義最初の数講からすでに歴史的な目的がはつきり現前しているのは、批判的な目的が最後の数講においてまで貫かれているからに他ならない。

主題として記憶を選んでいることからもすぐ分かる通り、もし本講義をベルクソンの著作のどれか一つに結び付けねばならないとしたら、目を向けねばならないのは『物質と記憶』であり、関連する心理學的テクストすべて（それらはおおよそ「精神のエネルギー」に収録されている）である。本講義においてベルクソンは、しばしば『物質と記憶』のさまざまな分析をほぼ忠実に辿っている。二つのテクストを比べてみると、さまざまな文章が直接的に対応しているという現象が實にしばしば観察されるほどである（私たちの注は、とりわけこの対応を示すことを目的とするものである）。だが、一八九六年の著作ではただ一つの例を用いるだけで十分説得的であるとされていた箇所が、本講義では時間を割いて、時に二、三の例を取り上げたりしながら（したがって同じ一つの問題に關して微妙に異なる二、三の觀点を示しながら）、詳しく（再）展開されているという場合もある。このことから、読者にとってはきわめて刺激的なことだが、『物質と記憶』の詳細版を読み直していくという感覚が時折生じてくる。刊行された著作版では（紙幅の節約という）よりシビアな制約によつて切り縮められた議論の文脈がもつ射程を完全に明らかにするような脚注を含んだ詳細版である。

だが、これもまた忘れてならないことだが——そしてもちろん顧問的錯覚に屈しないようにせねばならないが——、一八九六年から一九〇三—一九〇四年にかけて、ベルクソンはすでに『創造的進化』へと彼を導く道程においてかなり歩みを進めていた（この道程において決定的な一段階となる「形而上学入門」の発表は、直近の一九〇三年度開始早々「一九〇三年一月」のことである）。本講義からは、彼が今まさに取り組んでいる研究の本性についてのみならず、ベルクソンがすでにほぼ整え終えた『創造的進化』に登場することになる」言い回しすらも、感じ取ることができよう。だからこそ、以下に述べる私の指摘を通じて、眞の問題がよりよく見極められることになる。それは、主要な道具立ての一つが自由の問い（一九〇三年一九〇四年度講義の直後に行なわれた一九〇四—一九〇五年度講義のテーマ）であり、主要な研究対象が生命の問い（一九〇七年の著作の中心的テーマ）であるにもかかわらず、そのような探究を深めるために、ベルクソンはなぜ記憶というテーマにふたたび立ち戻ることを選んだのか、ということである。

最初の二講〔第一講・第二講〕は、「直觀」と「分析」の區別から始まる。数ヶ月前に「形而上学入門」によつて描き出されたそれを想起させずにおかない区別である。複数の著述家（とりわけテーム）との議論が繰り広げられるが、その目的は、あらゆる記憶はイメージであるのか、あるいは逆に、『物質と記憶』以降ベルクソンが主張するように、記憶それ自体は「純粹」ないし「潜在的」なままにとどまるのであって、その記憶が、すでに或る程度物質化された、或る特定の状態として「イ

第1講 分析と直観 一九〇三年一二月一日

みなさん、私たちは過去三年間にわたって哲学への、そして諸問題の歴史への一般的なイントロダクションを提示してまいりました。昨年度の講義では、その結論を引き出そうと試み、その折にも申し上げた通り、とりわけ哲学するためになされねばならない努力とその本性とはどのようなものかを理解し規定しようと努めたのでした*¹⁶。

その際に申し上げていたのは、この努力は、その本性からしても、その方向性からしても、日常的なやり方ないし科学的と呼びうるやり方で物事を認識するための努力とは、ちょっとやそっとどころか、根本的に異なるものであるということでした。兩者はまったく異なる、正反対の方向性をもつ努力だったのです。

昨年度お話ししたこの結論をまずはごく簡潔に要約しておきます。というのも、続く議論にはそれが必要だからです。

日常的・科学的認識と哲学的認識

さて、日常的な認識や、その延長線上にある科学的な認識とはどのようなものでしょうか。きわめて単純かついささか大雑把に要約すれば、その認識とは何よりもまず固体に関わるものだと言えるでしょう。私たちの精神が通常のやり方で働く場合、とりわけ固体的な、固定したはつきりとした輪郭をもった、不動の事物に対し影響力をもちます。私たちの日々の行動が働きかけるのは、その種の事物に対しであります。影響力を及ぼすのは、ごくはつきりとした輪郭をもつた事物に対しであります。私たちは、「固体性」という字義通りの意味でも「確実性」という比喩的な意味でも*¹⁷、ソリッドなもの (solidité) を必要としているのです。

物質的な諸事物、つまり物質を考えてみましょう。物質を液体の形で思い浮かべようとしてみましょう。物質の諸部分が動くものであることから、液体が液体であるのは、その諸部分がなおも移動することができるからだと私たちは言うでしょ

う。では、その諸部分それ自体は、固体でしょうか、液体でしょうか。もし液体だと答えるとすれば、私たちはまたしても流動的な諸部分を考えることになり、はつきりした固定的な輪郭を具えた安定的な事物に到達するまでは、同じ問い合わせが繰り返されることになるでしょう。私たちはそれを粒子だとか分子だとか原子だとか言うわけですが、いずれにしても、その粒子を思い浮かべるには、ごくはつきりとした、いわば固体的な輪郭を具えたものとして表象することが必要なのです。この点を、よく考えてみてください。

なぜ運動は、液体的ないし氣体的であるよりも固体的なのでしょうか。原子論は一般に、運動は固体的であると仮定しています。それというのも、私たちがそのように安定的で、完全にはつきりとした輪郭を具えた表象を必要としているからで

よく考えてみると、固体的な物体を、物質の進展の最終段階のようなものと考えるのであれば、そのような最終状態つまり終極に至つてようやく到達したこの物質の粒子のような何かを進展の起源に置くのは、限りなく非哲学的です^{*18}。しかしながら、私たちの精神が一般的に事物を表象するのは、まさにそんな風にしてなのです。繰り返しますが、固体と関係をもつことが私たちには必要なのです。日々の生活のなかで私たちの行動が気にかけるのは、固体的なものに対してなのです。

先ほど、それ「日常的に私たちがソリッドなものを必要としていること」は字義通りの意味でも、比喩的な意味でもまったくその通りなのだと申し上げました。というのも、一般的なやり方で動性を、つまりは運動を思い浮かべようと試みる場合、私たちは要するにどうやっているのでしょうか。或る地点から或る地点まで動体が運動する場合であれば、この動体が位置をずらして動いたのであり、位置の継起的な変化による移動としてそれを思い浮かべるのだと私たちは言うでしょう。つまりは、両極にある二つの地点、例えば、点Aと点Bとしましようか、それら二点のあいだに、点M・N・Pという、ある位置から次の位置へと動体が通過していく諸地点を置いていくことになります^{*19}。

ここで問題になっているのは移動です。この移動そのものをはつきりと思い浮かべたい場合、人は一つの位置、また次の位置、という具合にひと連なりの継起的な位置を思い浮かべます。つまり常に移動から諸々の位置へと向かってしまうのです。絶えず流動性・液体性を固体的な粒子によって再構成してしまうのと同様、私たちは運動や動性を、諸々の位置の継起によって、固体的なものとは言いませんが、安定的で固定的なものによつて再構成してしまうのです。

ちなみに昨年度、科学が運動に対して影響力をもつのはただこのような仕方によつてのみだということも説明しました。

第2講 記憶と知覚の差異——テーヌ説とビネ説

一九〇三年一二月一八日

みなさん、私たちは前回の講義で記憶の、個々の記憶の諸分析の研究から始めると言いました。それは、とりわけ本講義の歴史的部分、記憶理論の歴史へと向かうため、そしてまた私たちが提示したいと願っている結論を準備するためです。

視覚的記憶を特徴づけるもの、それを知覚から区別するもの

今日はこの分析から開始することになります。まずは重要な問い合わせを提起することにします。それは、「記憶の本性とはどのようなものか」というものです。問い合わせを厳密なものにし、曖昧さから抜け出すために、よろしければ、さまざまな記憶のカテゴリーの一つである視覚的記憶、人が見た事物の記憶を取り上げることにしましょう。そのような記憶を特徴づけるものとは何でしょうか。記憶は、例えばどのような点で知覚から区別されるでしょうか。視覚的記憶、見た物の記憶、それは要するに、視覚的知覚の記憶です。知覚、つまり或る対象それ 자체を知り、それを見て取るという行為と記憶とのあいだには、いかなる差異があるのでしょうか。その違いは何でしょうか。類似点は何でしょうか。結局のところ、それら二つの働きの関係はどのようなものなのでしょうか。

この問い合わせへの答えとして、現代の心理学が少なくとも最近まで通常与えてきたのは、次のようなものです。この答えは、哲學においては伝統的なものであるという意味で古典的なものですが、それによれば、或る事物の、例えば人が見た或る事物の記憶と、その同じ事物の知覚のあいだにある主要な、本質的な差異とは強度の差異だ、と。記憶とは何よりもまず、より少ない知覚だ、というのです^{*}。

このテーマは、いすれにせよ検討に値するものです。それが検討されるべきなのは、とりわけ私たちが身を置いている観点のためです。私たちは実際、記憶理論の歴史的説明を行なうことと計画しています。ところで、やがて見ることになり

第3講　連合説の検討——レーマンとヘフディングの再認識論　一九〇四年一月八日

観念連合の問題点

みなさん、私たちは記憶^{スヴニール}の分析を開始したわけですが、今回もこれを続けていきましょう。昨今の心理学が扱っているような記憶を研究していくわけですが、ただし忘れてはいけません。それを行なうのは、後に諸理論の発展について説明するためです。こうした理論や学説の説明を行なっているのは、ですから、少なくとも部分的には歴史的な目的を追求するためなのです。

前回の講義では、記憶^{スヴニール}そのものを研究しました。どれほど記憶が弱まつた知覚と見なされてきたかを探究し、記憶をその純粹な状態で、まだイメージとして保存されていない状態で記述しようと試みました。もっとも、この表象は摑みにくくもの、分析の目を逃れるものです。しかし、内面の観察であればそうとは限りません。この孤立した記憶は、ほとんどの場合、一個の実在であるよりもむしろ一個の可能性、潜在性なのです。一般的には、記憶は、知覚と結びついた形で私たちに与えられます。この結びつきはさまざまな形をとることができます。現在の知覚が、それに類似した記憶を呼び出し蘇らせる場合もあれば、類似の知覚とかつて結びついていた、以前の知覚の記憶を呼び起こす場合もあります。

これら二つの事例は、いわゆる連合の事例であり、一方は類似連合、他方は近接連合と呼ばれています。観念連合^{*81}と呼ばれていますが、この表現の選択はきわめてまずいものです。というのも、こうした事例において観念も連合もありはしないからです。こうした事例において実際に存在しているのは知覚であり記憶^{スヴニール}であって、観念ではありません。記憶を呼び出す知覚は現に存在していますが、観念というものは一般にもつと抽象的なものです。ですから、観念もないわけです。連合もまたありません。あるのは、知覚による記憶の喚起です。現在の知覚による過去の記憶の喚起と言つてもいいですし、

第4講 脳と再認 一九〇四年一月一日

みなさん、前回の講義では、私たちが今後行なうとしている歴史的説明のために、対立する二つの再認理論「レーマン説」と「ヘーディング説」について簡単にまとめました。特に、講義の後半では、以下の理論を検討し、そこまで終わりました。すなわち、現在の対象を再認すること、例えば視知覚を再認することは、一種の類似連合に存しているとする理論です。それによれば、知覚と、その知覚に類似した以前の何らかの知覚の記憶スヴァニールとのあいだで連合が生じているとする理論です。しかし本当のところ、これは連合ではありません。このテーマ*10を主張した人々は、慎重にも、今問題にしている連合（これは二つの項の並置を含意します）と、単純な知覚や感覺（これは何かしら不可分なものですが）との境界線上にある現象だと述べてきたのです。

この理論における再認は、例えれば視知覚と、それに類似した視覚記憶とのあいだで、意識の闇下で起こる融合によるものとなりましょう。対象が目の前にあり、一旦この融合が行なわれると、或る印、一種の目印によって微しづけられたかのような知覚が姿を現します。この知覚は一種の同化作用によって、自らのうちに記憶をいわば吸収しており、その作用は生殖同化*11にも比すべきものです。この知覚は記憶で満たされているわけですが、記憶はそれと見てとれるわけではありません。この知覚は記憶によつてもたらされたのですが、この独特な複合体（complexus）は、連合ではありません。というのも、そこで二つの項が区別され並置されているわけではないからです。それでも、この知覚が現にその知覚となつてゐるのは、そこに挿入されている記憶のおかげなのです。ですから、この何か独特なものこそが、私たちの目に、再認された知覚として、再認の印を持つて提示されるものなのでしょう。

以上が、前回の講義でまとめたテーマです。さらに私は、講義の最後に、この種の理論にしかるべき地位を、しかも非常に大きな地位を与えないわけにはいかないと申しました。それがどのようなものかはこれからお話ししましょう。とはいへ

第5講 三つの再認 一九〇四年一月二二日

みなさん、対象の再認にはおそらくいくつかの異なる方法があるということ、そして、同じ言葉を使っているからといって同じものを指すとは限らないということを前回の講義で見ました。

他のすべての科学と同じように、心理学は、言語によって提示される一定数の既成の枠組みを用いていると申し上げました。それらの枠組みを構成するにあたって、日常言語は科学的な分析や哲学的な考察に倣っていたわけではありません。そういうものにはまったく馴染みがないのです。¹⁴⁶

一般的に、日常言語が同じ言葉を用いるのは、あくまで私たちとの関係から見て同類の事物、私たちがそれをどう用いるか、つまり私たちの実用性との関係から見て同類のものである場合です。そこから、事物そのものもこれと同じように構成されているとか、同じ内部機構を持つているものであるということは帰結しません。詳しく言えば、いくつかの現象が同じ名前でまとめられている場合、それらの現象ないし意識状態が同じ実用的な機能を持つていてることは推定されますが、構成が同じであるとか、科学的な分析を施して同じものが見出されるはずだということはまったく帰結しません。

さらに詳しく言えば、事物であれ人であれ、ともかく再認が問題となっている場面で、一般的な言葉¹⁴⁷が用いられている場合、次のことはもつともらしい、いや確実なことですらあります。すなわち過去が現在のために、現在において、何らかの形で利用されているあらゆる場合¹⁴⁸、機能が同じあるいは同類であり、実用性が同じであっても、分析してみれば、事例ごとにプロセスはかなり異なっているということが明らかになりうるということです。というのも、ある意識状態が同じ機能を果たし、同じ事柄に役立つという事実から、その産出のメカニズムが同一であることは帰結しないからです。

第6講 記憶の諸平面 一九〇四年一月二九日

みなさん、直近三回の講義では、再認のメカニズムを、少なくとも或る特定の種類の再認メカニズムを分析しました。もう少し具体的に言えば、前回は比較的明瞭ではつきりした二つの再認方法をまずは区別しうるということをご説明しました。第一に、自動的再認があります。その仕事は、対象の知覚そのものに対して、身体のうちにすっかり設えられた一連の運動を結合することです。その総体が表しているのは、経験した知覚に後続する有用な反応です。このすっかり設えられたメカニズムが非常に簡単に作動するという、まさにそのことによつて私たちには馴染みの感じが与えられるのです。この馴染みの感じは、いわば知覚へと遡ることで、その知覚を再認させてくれるのです。それは、表象されるのではなく、実演され、活動的で、生きられる再認です。¹⁸⁴

私たちはまた、次のこともお話ししておりました。このまったく機械的な再認は動物と人間に共通するものであり、人間も一般に始めはこの再認を用いる。知覚対象に立ち戻るために、知性は注意の努力を用いるが、この再認にはそうした注意の努力は含まれておらず、この再認はただ、知覚する存在の側からは、前方への運動 (*mouvement en avant*)、つまり知覚を引き延ばす作用しか含んでいないのだ、と。再認された対象を利用するだけのこのまったく機械的な再認に加えて、これと別にもう一つの再認、すなわち注意を伴う再認を区別していたのはこのためです。あるいはむしろ、注意の現象に後続する再認とか、注意状態に後続する再認と述べたほうが良いかもしれません。いずれにせよ、この再認の仕事は、単に知覚を有用な反応へと引き延ばすのではなく、知覚へと立ち戻り、積極的にその輪郭を描くことで成り立っています。このデッサンも同様にまた、身体のうちにすっかり設えられています。私たちが以前、動的図式¹⁸⁵と呼んでおいたこのデッサンは、それがきわめてたやすく実行されるというまさにそのことによつて、知覚を再構築するのに役立ち¹⁸⁶、再構築されたその知覚に一種の馴染みやすさを付与するのです。

第7講 夢と覚醒 一九〇四年二月五日

記憶の二つの平面

前回の講義で私たちは、記憶について、一つの図 (schéma) を描きました。覚えていらっしゃると思いますが、私たちには、記憶の二つの極限的な平面を区別したのです。そのうちの一方の平面は、非常に狭いもので、私たちはそれを図形の一点にまで縮めていったのでした。私たちはこの平面に、身体の中に蓄積された運動メカニズムを位置付けたのですが、このメカニズムは、その作動に際して、私たちの過去の経験をいわば演じています。私たちはこう言いました。多くの動物はおそらくそうした記憶しか持っていないだろうし、動物たちにとって過去を想起するとは、現在の知覚を、習慣が設え準備した運動反応——その複雑さはさまざまであれ——によつて引き継ぐ (prolonger) ことである、つまりそうした運動反応は、まさに行動における記憶の等価物なのである、と。

さらに私たちはこう付け加えました。人間においてもこの種の記憶は存在し常に機能してはいるものの、概して純粹な状態においてではありません。そうしたあり方はあくまで一つの極限状態です。たしかに、この種のメカニズムが作動しない、あるいは作動する傾向をもたない——傾向という言い方をするのは、運動への傾向があれば「運動にとって」十分だからです——のは、稀なことです。例えば馴染みのある対象を再認するときには、まさしくそうした傾向が有する感じが、知覚へと遡ることによって、たいていの場合、見たことがある、馴染みがあるというニュアンスとでも呼べそうなものによって知覚を染め上げています。しかしながら、人間において、この種の再認とこの種の記憶が単独で、純粹な状態で機能するものは稀なことなのです。私たちは、それは極限状態だと言い、さらにこう付け加えました。これがおそらくは本質的な点なのですが、そうした記憶の働きを特徴づけるのは、いわばその非個人性 (impersonnalité) である、と。つまり、この記憶

第8講 心の病について 一九〇四年二月一二日

先日私たちは、記憶の理論の研究から、いくつかの知性の障害に関する一種の余談をして終わりました。それらの障害は、あたかも記憶の損傷であるかのように偽装しているのですが、それに欺かれないことが記憶の理論にとって重要であることを述べました。その点について、病一般、そしてとりわけ心の病に関わるいくつかの考察に足を踏み入れたのでした。

簡単に私たちの結論を振り返つておけば、私たちが述べたのは、しばしば——というのは、こうした主題について普遍的な見解は存在しないからですが——病気の症状と呼ばれているものは、病気そのものや危険そのものの症状というよりもはるかに、一つの努力、体が病気から逃れるための自然で自動的な努力の現れ \parallel 症状なのだ、ということでした。いくつかの場合、例えば、多かれ少なかれ重篤な中毒が体内で生じるとき、その中毒というのは、病人がそれに気づくことなく重症化しうること、病のうち目に見える症状（熱や発疹など）と呼ばれているものはすべて、病気そのものではなく、病人が病気から抜け出すために行なう努力の外観である、と私たちは言いました。そうであるなら、目に見えるさまざまな症状を作つてゐるのは、病気の作用ではなく、病に抗する病人の反応であることになるでしょう。このことは身体的な病、身体的な症状に非常によく当てはまります。私たちはこのことが、痛みや苦しみといったいわゆる心理的な症状についても、おそらくは身体的な症状よりもずっと当てはまると付け加えました。私たちはこう述べたのです。しばしばそうされるように、病気そのものの症状、魂が被る衰弱の現れと見てしまふと、苦痛というものを理解するのは困難です。しかし、身体的か精神的かを問わず、苦痛というものを、自らに対して損害を与えていたる原因に抗する、体 \parallel 有機体の自然な反応の——身体ないし心の——症状だと見れば、事態は分かりやすく、ずっと明瞭なものとなるのだ、と。苦痛とは努力の症状 \parallel 現れであつて、それほど理に適つたものでないことがあります。身体的なものにせよ精神的なものにせよ、それを遂行する体の部分という観点からすれば、努力は概して——あるいは常に——理に適つた努力なのですが、「体の」全体という観点からは理に

第9講　注　意　一九〇四年二月一九日

みなさん、前回の講義で、私たちは注意の問いに取り掛かりました。記憶の問題によつて私たちはそこに導かれたのです。この論点について心理学が下したさまざまな結論を要約しつゝ、私たちはこう述べました。注意とは、その効果の観点から見れば、心理状態の強度を増大させる、あるいは増大させるように見える。注意が向けられている状態というのは、より高い強度をもつてゐる、あるいはもつてゐるよう見えるのだ、と。

私たちは、注意は表象の明瞭さを増大させるのだと付け加えました。これはつまり、知覚の表象に注意を向けると、意識に示されるディテールの数が増えていくということです。そうした状態は、より注意が注がれるほど、それだけより豊かなものになるのです。

最後に、注意は、表象の理解可能性を増大させる、つまりその解釈をより容易に、そしてより明瞭にしてくれるのだとも私は述べました。

注意における創造——表象の強度と豊かさの増大

さて以上が、異論の余地のない三つの効果です。こうした注意の体系には、一見したところ非常に奇妙な——謎めいた、とさえ言えるでしょう——何かがあります。注意の問題は、今や心理学における主要問題となつたと言えますが、どうして現在の心理学がこの問題にこれほど大きな関心を寄せているのかというと、それはこの奇妙さのためなのです。その奇妙なものとは、表象に注意を向けた後に続くように見えるあの一種の創造のことです。私の目の前に一つの対象があつて、私はそれを眺めるとします。その対象は、私がそれを眺めているあいだ、同一のものであり続けていますし、注意しようがしまいか、私が対象をそのように眺めているあいだずっと、網膜の印象、目に与えられる印象は同一のものでしょう。しかし、

第10講 注意と記憶の能動性 一九〇四年二月二六日

前回の講義の結論を手短にまとめます。私たちは目下のところ注意を記憶との関係において研究してきたのですが、注意のもたらす主な効果として、まずもって知覚の心理状態の強度を増大させること、次いで知覚の明瞭さを増加させること、そして最後に解釈のメカニズムを容易にし、可能なものとしさえする——というのは、注意によってのみこのメカニズムが存在するからですが——ことが挙げられると述べておきました。

強度の増大(1)——シユレーダーの階段

まず強度についてです。現実のものか見かけ上のものかはともかく、注意を向けることでその感覚の強度は高まるものですが、こうした強度は、直接的な記憶の効果とみなされなければならない、と私たちは言いました。感覚が背後に残す記憶は、当の感覚へと遡り、それに重なるのです。それはちょうど音がその残響によって強調されるようなものであると、私たちは述べました。のことから帰結するのは、先日申し上げたように、注意とは必ず非連続的なプロセスであって、その非連続性は、単純な感覚に注意が向けられる際にとりわけ際立つてくるだろうということです。

前回の講義の最後で、私たちは、何年か前から注意のプロセスの非連続性はすでに注目されていたと言いました。注意は、揺れ動くのであって、連続的なものではありません。非常に弱い光、存在しているのかしていないのか分からぬほどに弱い光に目を凝らして、ようやく認めたとしても、その光は現れ^{*340}ては消えるのです。周期的な出現と消失があるということです。

こうした揺れ動きを、視覚について計測した結果、その周期は視覚に関する一定であるということが分かっています。聴覚の領域でも同じことが観察されています。夜中に十分離れたところにある時計のチクタクのように、とても弱い音、音が

第11講　連合主義心理学の理論的起源　一九〇四年三月四日

物理学と化学の模倣という方法

みなさん、次回と次々回の二回の講義では、記憶の生理学的な説明を研究しようと考へています。そのあと、記憶の諸理論がどのように進展してきたかについての批判的な研究に移り、記憶^{メモワール}を脳のプロセスに基づいて説明するこうした生理学的説明は、人が想像するよりもはるかに多くの形而上学的理論を含み込んだものであること、そこには形而上学的な理論が、もちろん隠れた形ではありますがたしかにあること、こうしたことを見ようと思つています。

しかし、この研究に手をつける前に、ここまで講義で何度か出会つてきた心理学、記憶事象^{メモワール}を脳のみによつて説明するやり方をいわば準備した心理学について、いくつか述べておきたいと思います——これが本日の講義の目的です。それはすなわち、私たちが原子論的と呼んだ心理学のことであり、各心理状態を自足し独立した存在物 (entity) とみなすもの、つまりは「連合主義的」と呼ばれる心理学のことです。本日の講義で私がこれから特定したいと考えているのは、この心理学が有する公準、その一般原理、その理論的起源なのです。

歴史的な観点から、まず言ふべきことが一つあります。この心理学は、程度に差はある、隠れた形で常に存在してきたといふことです。諸々の心理状態を、モザイク調のタイルの寄せ集めのように、判明に区別され、分離され、並置可能な諸状態として思い浮かべることは、人間精神にとって自然なことです。自然なことなのですが、ただこの考えが科学的な形態を纏つたのがおよそ一世紀前からというだけのことなのです。

この考えが科学的な形態を纏うことになつた起源を探し求めるなら、容易に見出すことができます。この理論は、その起源からしてすでに、物理学と化学の方法を模倣しようとする試みとして現れます。この学説の創始者の一人であるディ

第12講 記憶と脳状態の関係について 一九〇四年三月一日

連合主義心理学と脳に基づく記憶理論との相補的関係性

みなさん、直近の何回かの講義の主な目的は、私たちが心理学についての「原子論的」と呼んだ考え方、要するに連合主義的な考え方と、記憶を純粹に機械論的に、すなわち脳によつて説明するやり方とのあいだに密接な連帶があることを示すこと——あるいは少なくとも、その準備をすることでした。

これら二つの学説のあいだにある種の予定調和が存在しているということ、一方が他方を要請するということ、このことには、どちらの学説から出発しても容易に気づきます。純粹に脳のみに基づいた記憶の保存の説明を検討すれば、その説明が何よりも連合主義的な仮説と相性が良いということ、そしてある意味ではこれと連帶しているということさえ、容易に分かります。

この種の説明のうち、最も現代的で最新型のものを検討してみましょう。記憶は、特定の細胞、特定のニューロンの変容とみなされることになります^{*41}。そうすると、こうした組織学的な要素のあいだに或る関係が安定的な仕方で打ち立てられ、それらの要素は、安定的な仕方で印象を受け取ることになるわけです。記憶はそこに貯蔵され、そうした形で保存されるというのです。これでは結局のところ、ある記憶は別の記憶に対して外的であるということになります。こんな風に、動的な仕方でグループ化がなされていくわけですが、それらはみな干渉し合うことがありうるので、共通要素を有している場合もあるでしょう。ただそれでも、各々はあくまで自存する全体を形成しているわけで、それゆえ、記憶を脳実質内に局在化することは、意識状態というものを、互いに切り離され区別されたものとして、要は紛れもない心理的原子として考えるような心理学を、暗黙のうちに容認することになるのです。

第13講 隨伴現象説の諸困難 一九〇四年三月一八日

みなさん、前回の講義で私たちは、記憶の各々が脳物質内に記録されている、あるいは記録されるものであると考えるのは結局のところ困難であり、不可能であるということについて、いくつか例を挙げてお話ししました。また、そのようなテーゼは、一方には意識があり、他方には脳に関する諸現象があつて、両者は並行関係にあり、さらには同等ですらあるという考え方と緊密に結びついているということをお示ししました。

まず申し上げたのは、この同等性という仮説によつて、私たちは以下のような結論に行き着くということでした（事をより精確に表現するなら、ここで同等性といふのは、隨伴現象としての意識という形の同等性のことで、つまり意識が燐光^{*}446のように、脳の運動や脳において筋肉に関わつていて運動につき従い、それらに折り重なつて、その痕跡を描き出すということです）。それは、隨伴現象としての意識というテーゼをたいてい是としてきた從来の進化の哲学の根本原理そのものに反するような結論です。というのも、もし意識が一部の脳現象に後からさらに付け加わるようなものであり、脳現象はいわば意識のことなど気にすることなく自身の道を進むということなのであれば、もしそうなら、意識は無用であることになり、生物にとって無用なあらゆるものと同じく、意識もまた進化を通じて次第に消えていったはずだからです。ところで、意識は存続しているのですから、それはつまり意識は何かの役に立ち、何かをなしている、ということです。

隨伴現象説の形而上学的困難

しかし、そういつた困難に加えて、この種の仮説が形而上学的な次元で行きあたつてしまふ正真正銘の不可能事が存在するということをお話していました。それは、この仮説が明晰ではなく、さらには、どの形而上学的仮説を選ぶのであれ、同等性仮説に固執するかぎり理解不可能なものではあるということです。

第15講 古代の心理学のある形而上学的基盤

一九〇四年四月一五日

今後の講義計画

みなさん、後半の学期では、記憶理論がどのように進展していくかという歴史を素描するつもりです。この素描は非常に短いもの、非常に不完全なものとなるでしょう。一つの研究を確立するというよりは、研究のプランを描くことが仕事となります。というのも、もう数回の講義しか残っていないからです。私たちの追求している対象は歴史的なものと同じく、あるいはそれ以上に、学説的で理論的なものであるということは承知しています。本講義の前半で示したように、記憶という現象についての最もありふれた、最もよくある説明は、一方では精神の生についての連合主義的な考え方を含意しており、他方では——この考えははつきり表明されることもありますが——記憶が精神のうちに保存されるのは、それが物質的に保存されるからでしかありえないということを含意しています。何らかの形で、脳実質内に記憶の貯蔵庫があるというわけです。これに対して私たちが試みたのは、病理学的な事象や正常な事象を全般的に見れば、信じられているほどこの仮説は確証されていないという主張です。そこから、この仮説は外見上は経験的なものに見えるにもかかわらず、どうやら或る種の信仰、ひょっとすると形而上学的な偏見でさえあるようなものにすぎないのだと推論しました。ただし、この種の偏見はとても自然で根深く、あまりに自然で根深いがゆえに、それを免れるには相当の精神的な努力が必要です。

本講義の第二部で私たちが明らかにしたいと思っているのは、まさしくこうした形而上学的公準であり、そのためにこの仮説が実際に辿ってきた進展そのものをごく手早く素描しようと思っています。

校訂者序

＊₁

二〇一六年にフランス大学出版局から本書と同じシリーズで、私の校訂によつて出版されている。

＊₂

「本講義の前半部にある」これらの講義のうち最後の第一四講は残念ながら、私たちの与り知らない理由によつて伝わっていない。

念のために言つておけば、一九〇一年から一九〇五年にかけて行なわれたベルクソンのコレージュ・ド・フランス講義は、ジャック・ドゥーセ文学図書館に委託・保管されている。これらの講義の公刊を許可してくださったことに対し、ベルクソンの権利承継人であるアニー・スーシュルジヨ氏、図書館長であるイザベル・ディウ氏に感謝したい。ちなみに、現在、ドゥーセ図書館のおかげで、ベルクソンの所有していた蔵書の（少なくとも同図書館が受け入れた部分に関しては）完全な目録がネット上で公開されている。[www.bjd.opac.sudoc.abes.fr](http://bjd.opac.sudoc.abes.fr)

＊₃ これら最後の五講はすでに私たちの手により、『ベルクソン年鑑』第一巻「ベルクソン、ドゥルーズ、現象学」（パリ、PUF、叢書エピメテ、二〇〇四年、一七一一四九頁）において公刊されている。私たちはここに、当時校訂したテクストと、当時それらのテクストに加えた学術的注記を、そのまま再録する。変えたところと言えば、せいぜいのところ、見逃していたいくつかの綴り間違いを正したり、新たに一巻にするにあたつて表記を統一したり、その後の刊行物に応じて、いくつかの参照文献をあちこちで修正したりといった程度である。校訂注に関しては、哲學的に直接文意の理解に役立つ注のみを残し、タイピストによる（とりわけ固有名詞に関する）明らかな聞き間違いや純粹な綴り間違いに関する注は省いたが、逆に、いくつかの文章の文構造の実質的な難解さ（ベルクソン自身に由来するであろう問題）を指摘する注記は保持した（これは本シリーズ「ベルクソンのコレージュ・ド・フランス講義」全体を通しての方針である）。

論文「脳と思考」（ES, pp. 192-193）、講演「心と体」（ES, pp. 38-41）、やむには『創造的進化』四四七頁（EC, p. 354）も同様である。

＊₄ 『物質と記憶』二〇六一二二三頁（MM, pp. 156-163）。

＊₅ 【訳注】第三講注＊₆を参照。

＊₆ 【訳注】第三講注＊₇を参照。

* 9 論文「現在の記憶と譯った再認」(ES, p. 110-152)。

* 10 論文「現在の記憶と譯った再認」(ES, pp. 125-129)、また「人格の理論」(一九一〇—一九一一年度のコレーショ・ム・トランヌ講義)を参照のこと。(Mélanges, pp. 852-853)。

* 11 とりわけ「物質の記憶」「第七版序文」(一九一一年)を参照のこと。『物質と記憶』一八一—九頁(MMM, pp. 8-9)。

* 12 本講義と同時代のテクストである「形而上学入門」では、「生命的不安」としての「魂」と、「容易な知的理解がもたらす安心」としての「観念〔イデア〕」を対比した上で、古代の人々と近代の人々とで両者の位置づけが逆転しているやまを論じてゐる(PM, p. 219)。

* 13 【訳注】論文「脳の思考」(ES, p. 198)。

* 14 【訳注】英語ではepiphenomenalismと表記するが、フランス語ではépiphenoménismeと表記する。

* 15 【訳注】『思考の動き』「序論」(第一編)(PM, p. 94)。

第一講

* 16 一九〇〇年以来、コレーショ・ム・トランヌ「ギリシア・ローマ哲学」講座の正教授であつたベルクソンは、それまでの三年間を次のテーマに充てていた。「原因の観念」(一九〇〇—一九〇一年度)、「時間の観念」(一九〇一—一九〇一年度)、そのうちいくつかの講義が保存されている。一〇一八年にPUFより刊行予定(「一〇一九年に刊行された」)、そして「時間観念の歴史」(一九〇一—一九〇三年度、カミーユ・リキエ校訂、パリ、PUF、一〇一六年〔邦訳、書肆心水、一〇一九年〕)。[1]

* 17 『物質と記憶』(一〇九一三一四頁(MMM, pp. 240-244)そして『創造的進化』一九七頁(EC, p. 154)を参照。[2]

* 18 おそらくはスベンサーに対する婉曲な批判であらう(『創造的進化』四五八—四六六頁(EC, pp. 362-369)参照)。[3]

* 19 『物質の記憶』一七二一—一七四頁(MM, pp. 210-211)参照。[4]

* 20 【訳注】『時間観念の歴史』講義中に四回登場していた(一九一八一、一七八、一五七頁)三四五頁注四一も参照)。

* 21 【訳注】『時間観念の歴史』講義中に四回登場していた(一九一八一、一七八、一五七頁)三四五頁注四一も参照)。「私が……」や直觀といふのは、対象の内部に身を置き、その対象がもつ唯一のもの、すなわち表現であらざるものと一致する共感である(『思考の動き』所収の「形而上学入門」(PM, p. 181)、『創造的進化』一一一五—一一一八頁(EC, pp. 177-180)参照)。[5]

* 22 「形而上学入門」(PM, pp. 177-182)参照。[6]

* 23 「形而上学入門」(PM, p. 206)。[7]

* 24 ベルクソンによれば、あらゆる偉大な哲学者が見つめるところには、「何か単純なもの、限りなく単純なもの、あまりに並外れて単純なためにその哲学者が言うことに決して成功しなかつたものがあります。彼が一生語り続けたのはそのためです」(「哲学的直觀」(PM,

P. 119〔原書のP. 108は譯り〕)。[8]ベルクソンはのページを同時代に執筆したテクスト「ラヴヨッソンの生涯と業績」で引用し注釈を加えている(PM, pp. 264-266)。レオナルド・ダ・ヴィンチの『絵画論』(Trattato della pittura)は、一六世紀に行なわれた編纂に基づいて一六五一年にはじめて刊行された。[9]

本書は、ベルクソンが一九〇三年一二月から翌年五月にかけてコレージュ・ド・フランスで行つた講義の記録である。講義の成り立ちや、主要著作との関係、その他基本的特徴についてはすでにアルノー・フランソワが「校訂者序」にて示してくれている。

本解説では、もう少し詳しく文脈を掘り下げ、本講義における「記憶」理論の内実に光を当ててみたい。

まず、講義全体はおよそ以下の構成になっている（ロー マ数字による分類は本解説内で用いるために仮に設定したもので）

- I. 第一・二講——方法論的考察
- II. 第三・五講——再認の理論
- III. 第六・八講——記憶の諸平面と精神病理
- IV. 第九・一〇講——注意の理論
- V. 第一一・一四講——連合主義・随伴現象説批判
- VI. 第十五・一九講——歴史的検討

見ての通り、『記憶理論の歴史』というタイトルにもかかわらず、前年度の『時間観念の歴史』とは異なつて、ほとんどの講義

が「理論篇」に費やされており、実際の「歴史篇」は最後の五講のみとなつてゐる。もちろん、そのことは決して哲学史的検討が疎かにされていることを意味しない。フランソワも指摘するように、「心身の同等性」テーゼが経験的な出自を持たないことを立証する本質的な役目を果たしているからだ。

だがそれにしても、理論篇のこれほどの充実ぶりが、読者にとつてかけがえのない価値を持つことに変わりはない。ベルクソンの時間と心の哲学において、「記憶」が中核的な概念であることは疑いの余地がない。そしてその「記憶」が極めて独自の仕方で練り上げられた概念であること、それを開陳する『物質と記憶』が並外れて難解な書物であること、それらもまた周知の事実である。その「記憶」をめぐつて、円熟期のベルクソン当人が、一般大衆向けに、しかし水準を落とすことなく、たっぷりと時間を使って講義をしてくれる。この新資料の発見とその出版がもたらす恩恵は、専門家にとどまらず、ベルクソン哲学に関心を寄せる多くの人々にとって計り知れないものだ。

『時間観念の歴史』と同じくプロの速記者のおかげで一語一句復刻されたこの講義録は、著者のアイデアをそのモチベーションにまで繋りつつ明瞭かつ雄弁に語り直してくれている。事例は豊富

に追加され、文脈はより具体的に示され、概念はより詳細に——
哲学者自身の声で——解説される。これまで見通しの悪かった
数々の論点に、かつてない光量のスポットライトが当たられ、コ
アとなる概念の解像度が一気に上がる。深い闇のなか、そこかし
この断片を手探りで確かめるだけだった一帯が、突然晴れ上がり
その驚くべき光景を露わにするのである。

それだけではない。いくつかの論点は『物質と記憶』から明確
にアップデートを遂げており、多元的な生成途上にある哲学者の
生の姿を垣間見せてくれる。ベルクソンが好む比喩で言うなら、
蛹のなかでどんな「振動」が繰り広げられているのかを覗き見さ
せてくれるわけだ。しかも、それらの論点は、例えば続く『創造
的進化』のうちに目的論的に回収されてしまふような中間生成物
ではない。「事実の諸線」の声にしたがって進む彼の探究は発散的
で、初めからゴールを決めて進むようになつていい。現に、こ
の講義には他のどの時期のテクストにも見られない固有の議論が
——『時間観念の歴史』の場合同様——惜しみなく展開されてい
る。どの論点も新鮮で、生煮えに見える議論も含め、読み手に驚
きと知的興奮を与えてくれるものだ。

目の前のターゲットに沈潜し、その問題が導く路線を進めると
ここまで進む。それゆえ彼の講義スケジュールはいつも後ろ倒し
になりがちで、聽講しているこちらが不安になる程だ。悪く言え
ば行き当たりばったりにも見えるわけだが、それは「仕立て屋」
の哲学を自任する彼の方法論的な要請であった(132, 211)「数字
は本書ページ数を示す。以下同様」。手持ちの概念枠組みのお仕着
せを禁じ、「採寸なしでは仕事をしない」(PM 196)。それが彼の
指針である。そして実在の採寸に終わりはない。事象への敬意と

慎みに裏打ちされた彼の「聽診」的姿勢は、講義だからといって
手を抜かれるなどということは決してなかつた。その変わらぬ愚
直さを認めて、われわれは安心するのである。

そうしたわけで、この講義は、学説に新たな觀点をふんだんに
追加する。そこに本講義の、単なる「普及版」にとどまらない積
極的な価値がある。今後、ベルクソン解釈はこの講義を踏まえず
になされることはできないし、ここからどのような解釈を引き出
すかも将来に開かれている。以下、本講義の流れに沿つて主要論
点を解説しつつ、紙幅の許す限り、重要な変更点をピックアップ
して読者諸氏の注意を喚起したい。

先へ進む前に、他のテクストとの位置付けを挙げておく。本講
義がなされたのは一九〇三——一九〇四年。これに時期的・内容的
に強く関連する公刊テクストは、第二主著『物質と記憶』(1896)、
のちに『精神のエネルギー』に収録される三點の小論「夢」(1901)、
「知的努力」(1902)、「脳と思考」(1904)、「現在の記憶と偽再認」
(1908)、「思考と動き」に収録されることになる二点、「形而上学
入門」(1903)と「ラヴェッソンの生涯と業績」(1904)、そして第三
主著『創造的進化』(1907)である。

I 方法論的考察（一・二講）

『時間観念の歴史』同様、分析と直観の区別の導入から全ては始
まる。同年に公刊した「形而上学入門」をバラフレーイズする形で
これを簡潔に示した後で、ベルクソンは「記憶」の議論に固有な
土台として、その問題圈を「四つのモーメント」に仕切つてい
る。(1)記憶の形成、(2)再生(想起)、(3)連合、(4)位置付けという区

本書は、Henri Bergson, *Histoire des théories de la mémoire. Cours au Collège de France 1903-1904, édition établie, annotée et présentée par Arnaud François, sous la direction scientifique de Frédéric Worms, Paris: PUF (Presses Universitaires de France), 2018.* の全訳である。本書は、110世紀前半のフランスを代表する学者アントリ・ベルクソン（一八五九—一九四一）が、フランスの学問的権威の最高峰たるコレージュ・ド・フランス（以下「コレージュ」と略す）で一九〇三—一九〇四年度に講じた講義が収められている。

講義の成り立ちや、主要著作との関係、その他基本的特徴についてはすでにアルノー・フランスが「校訂者序」において示してくれているし、やいに詳しく文脈を掘り下げ、本講義の中心的なテーマである「記憶」理論の内実に光を当てる作業は現在日本のみならず世界のベルクソン研究を牽引する平井靖史によって十分に行われている。

では、ここでなすべき作業とは何か。平井も解説で述べている通り、本書『記憶理論の歴史』には、前年度の講義『時間観念の歴史』と一目見てわかる大きな違いがある。それは、全一九講のうちの実に一四講が第一部とでも言うべき理論篇・学説篇に費やされており——ただし、その締めくくりとなつたはずの第一四講の

記録は欠落している——、実際に「歴史」を語る歴史篇・哲学史篇は最後の五講のみとなつていて、その点である。もちろん、そのことは決して哲学史的検討が疎かにされていることを意味しない。フランスも指摘するように、「心身の同等性」テーマが経験的な出自を持たないことを立証する本質的な役目を果たしているからだ。平井の解説は、理論篇の流れに沿つて主要論点を解説しつつ、重要な変更点をピックアップして読者諸氏の注意を喚起するところに充てられていた。そこでこの「あとがき」では最後の五講で展開された哲学史パートに対して適宜解説を加えておくことにしよう。

I　予備的考察——なぜ一九〇三—一九〇四年度は「記憶」なのか

本書の大部分を占める第一部で、ベルクソンは、心理学に関する観察可能な科学的データから出発し、それらのデータに関してこれまで提案されてきた諸解釈はすべてある形而上学から源泉を汲んでおり、その点に関して批判されないままに来てしまつて、ることを論証しようとしていた。その意味で、記憶理論の歴史を完全に語り尽くすには、形而上学の歴史について語らないわけに

はいかないのである。記憶現象に関する諸解釈の大部分に沿つて、いたこの形而上学はさまざまなる形をとる。①化学などの自然科学に範をとった構成の心理学なら、**心理学的原子論** (*atomisme psychologique*) といふ形をとるだろう。あるいは、②意識の諸現象のうちに固体的で単純な要素を探し求める連合主義的心理学 (*psychologie associationniste*) といふ形をとる。この場合、単純な要素とは例えば知覚であり、そのように捉えることで記憶が説明不可能になってしまふ。知覚と記憶のあいだに本性の差異を見るべきところに、知覚の程度の差異を見てしまふからである。最後に、③連合主義の近現代的な形態として、記憶とははたらき (*acte*) ではなく、その本体は脳のうちに物質的に保存されていると考える**隨伴現象説** (*épiphénoménisme*) がある。これまでに展開されてきた記憶現象にまつわる諸解釈はすべて、以上のような形而上学をひそかに孕んでいた。そこには生成しつつあるもの (*se faire*) ないし運動を捉えることの拒否がある。以上のような諸形態とする形而上学には歴史がある。その歴史を辿り、その形成の軌跡を——もちろん限られた時間の中ではあるが、しかしその限られた時間ということを考えればやはり驚くべき密度で——追跡するのが最後の五講の役割なのである。

だが、歴史篇の意義を強調する作業に取り掛かる前に、たとえば満足のいく回答は与えられないとしても、少なくとも提起だけはしておくべき一つの問い合わせがある。それは、すでに七年も前に『物質と記憶』において十分に練り上げられていた記憶理論へと、一

いつ個人的な仕事を題材とはしていない場合のみ」である以上、「コレージュ「ド・フランス」ですらも、現在進行中の研究から講義の直接の主題を引き出さないことを格率」^{*}としていたベルクソンは、すでに十分に練り上げられた自己の思索を第一主著『時間と自由』、第二主著『物質と記憶』の順番に取り上げたのだという仮説である。だが、少し歴史的な事実関係を調べれば、この仮説は即座に却下される。本講義終了後の一九〇四年二月に、ガブリエル・タルドの死去に際して、彼が担当していた現代哲學講座への異動を願い出る際に、ベルクソンは教育と個人的な仕事の「双方を可能なかぎり密接に」結び付けたいと願っていたのであり^{**}、そもそも本講義で取り扱われた幾つかのテーマ自体、その前後に刊行された諸論文・講演——これらは後年論文集『精神のエネルギー』(一九一九年) に收められる——となると密接な関係にあるのである。

(1) 一九〇一年の講演「夢」で主張されたテーゼ——夢の本質は分離 (*détachement*) にあり、説明を要するのは覚醒であつて夢自身ではなく、覚醒とは本質的に緊張である——は、本書第七講でふたたび取り上げられる。

(2) 一九〇二年に『哲學雑誌』(*Revue philosophique*) に発表された論文「知的効力」で提示された「動的図式」 (*schéma dynamique*) の概念が、本書第四講では、記憶が知覚と結びつく努力としての再認を説明するに際して、まったく異なる仕方で持ち出されてい、單な答えがある。「人がうまく教育できるのは、調査・研究と